

リンパ節腫脹について

一般内科部長 藤田 充啓

今回はリンパ節腫脹についてお話をさせていただきます。

・リンパ球、リンパ管について

我々人間が生きていくためには体内に侵入した病原体を排除し、感染から身を守ることが必要です。この防御機構が「感染免疫」であり、この機構で重要な役割を果たしているのがリンパ球です。

また我々の体にはリンパ管と言われる構造があります。リンパ管は血管と同様に全身に網の目のように張り巡らされており、その中をリンパ液が循環しています。

・リンパ節腫大が起こる原因

リンパ節腫大が起こる原因は表1に示したようにいろいろなものがあります。

最も頻度が高い原因は何らかの抗原(異物)刺激に対する免疫反応の結果、リンパ節内のリンパ球が増加して腫れる場合です。つまり細菌やかび、またはウイルスなどによる感染症の時にみられるリンパ節腫脹です。また診療の中で重要性が高いものは、腫瘍に関連するリンパ節腫脹です。これにはリンパ球などのリンパ系組織そのものが腫瘍化する場合と、他の部位に発症した腫瘍がリンパ節に転移や浸潤を来している場合があります。

・リンパ節腫脹の患者様が受診されたら・・・ (図1)

他の疾患と同様、まずは十分な病歴をお伺いします。次に理学的所見として体表面から触知出来るリンパ節を中心に詳細な所見をとらせていただきます。リンパ節の部位、数、大きさ、性状(硬さ、まわりとの融合性など)などが重要になります。また全身のリンパ節腫脹が疑われる場合には超音波検査、CT、シンチグラムなどの画像検査を受けていただきます。血液検査では、血球検査、炎症反応をはじめとした一般的な項目以外に、感染症が原因と考えられる場合には抗体などの特殊な検査を追加させていただきます。

・リンパ節生検とは

外科あるいは耳鼻科の先生方において局所麻酔下で皮膚の小切開を行い、腫大しているリンパ節を丸ごと(大きい場合には一部を切り出す場合もあります)摘出します。取り出したリンパ節は病理検査を始め、必要に応じてリンパ節を構成している細胞の表面マーカー(細胞表面に存在する標識のようなもの)、染色体検査などに提出します。

リンパ節腫脹を来す疾患のうち感染症の代表である伝染性単核球症と腫瘍性の代表である悪性リンパ腫について簡単に記載します。

- 1) 伝染性単核球症：発熱、咽頭・扁桃炎、頸部リンパ節腫脹、肝脾腫(肝臓、脾臓が大きくなること)などが主な症状です。EB(イービー)ウイルスというウイルスによる感染によって引き起こされます。EBウイルスは多くの場合、幼少期に初感染し、ほとん

どが不顕性感染で終わりますが、思春期以降に初感染した場合には高頻度に伝染性単核球症を発症します。これとよく似た症状を呈するものには、サイトメガロウイルスやヒトヘルペスウイルスなどがあります。伝染性単核球症も多くの場合対症療法のみで数週から2ヶ月ほどで回復します。

2) 悪性リンパ腫：リンパ節が腫脹する悪性疾患の代表的なものです。血液悪性疾患の中で最も多い疾患の一つです。

<疫学>日本における悪性リンパ腫の発生頻度は人口10万人あたりおよそ17人(1997年、男性10.7人、女性6.1人)でこの数十年で急速に増加しています。

<成因・病態>いくつかの悪性リンパ腫は病因遺伝子が判明しています。また日本、特に西日本で多い成人T細胞リンパ腫はHTLV-1ウイルスの感染により引き起こされることがわかっています。同様にEBウイルスもリンパ腫の発症に関連することがわかっています。

<分類>悪性リンパ腫の分類には主に腫瘍細胞の起源から分類されるWHO分類が用いられています。大きくはホジキンリンパ腫と非ホジキンリンパ腫の二つに分類されます。さらに非ホジキンリンパ腫は細胞系統の違いによりT細胞性リンパ腫とB細胞性リンパ腫に分類されます。日本で最も多いのはB細胞性リンパ腫で全体の70%を占めます。

<診断>正しい診断のためにはリンパ節生検を行い、通常病理学的検査に加え、免疫染色、遺伝子検査などの詳細な検索が必要になります。また治療方針決定のためには病気の広がり(病期)の評価が重要であり、CT、シンチグラム、骨髄穿刺、場合により消化管内視鏡検査などを用いて全身検索を行ったあと病期を決定します。

<治療>組織型や病期に応じて放射線治療、抗腫瘍薬を用いた化学療法を単独、あるいは組み合わせて治療をおこないます。悪性リンパ腫は放射線治療、化学療法の効果が最も高い疾患の一つであり、治癒が期待できる疾患です。また非ホジキンリンパ腫の中でもCD20陽性B細胞性非ホジキンリンパ腫に対しては先月号で紹介のあった分子標的治療薬の“リツキサン(CD20に対する抗体)”が有効であり積極的に使われています。

以上、今回はリンパ節腫脹について簡単にお話しさせていただきました。リンパ節腫脹を来す原因はたくさんあります。経過観察だけでよい場合から悪性腫瘍まで幅広い疾患の一所見として現れてきます。もしリンパ節かなと気がついた時には早めに医療機関を受診しましょう。

表1 リンパ節腫脹の原因による分類

-
1. 免疫反応によるリンパ節腫脹
 - 1) 細菌感染症：ブドウ球菌 など
 - 2) ウイルス感染症：伝染性単核球症、風疹、AIDS など
 - 3) その他の感染症：クリプトコッカス、トキソプラズマ、梅毒 など
 2. 病原体のリンパ節への直接感染による腫脹
 - 1) 化膿性疾患：ブドウ球菌 など
 - 2) 肉芽形成：結核 など
 3. 悪性腫瘍
 - 1) リンパ節原発悪性腫瘍：悪性リンパ腫
 - 2) 他の悪性腫瘍のリンパ節転移：がんの転移 など
 4. リンパ節腫脹をきたす原因が明らかでないもの
 - 1) 自己免疫疾患：全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群 など
 - 2) 薬剤性リンパ節腫脹：ヒダントイン など
 - 3) その他：
 - a. 肉芽腫形成：サルコイドーシス
 - b. 甲状腺機能亢進症にみられる反応性腫大
 - c. 亜急性壊死性リンパ節炎(菊地病)
 - d. 川崎病
 - e. キャッスルマン病
-

図 1：リンパ節腫脹についての診断の流れ

